白い魂、命の球

翔っち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白い魂、命の球

【Ｎコード】
Ｎ８７８４Ｆ

【作者名】
翔っち

【あらすじ】
病気でも甲子園を目指す少年の短い話です。この話はだいぶ変わっていますが、もとは事実です。（名前などは全て変更されています）

太陽が熱を含む日差しを照りつける。空を仰いでみる。今日はいい練習日和だ。肩にかかるタオルで汗をぬぐう。そしてタオルをまっすぐ振り下ろす。乾いた音が、庭に響く。朝だというのに異常な暑さだ。すぐに汗が流れてくる。足元にあるバットを拾い、再び振りなおす。がらがらと音をたてて窓が開き、少し幼い顔が覗く。薬の時間か。ドアの方へ進む。ドアノブに手をかけて、もう一度空を振り返ってみる。青く、雲一つ無い空が広がる。

俺の、最期の夏が来る・・・

このボールを追いかけ始めたのは、小学三年生の時だ。自分では憶えていないが、たまたま父が見ていた野球中継を見て、これがしたいと言ったらしい。両親は、反対せずに快くやらせてくれた。地元にクラブチームがあったのでそこに入った。

野球を始めてからは、土日の練習が楽しくてしょうがなかった。学校は放課後になると、掃除もそっちのけで一目散に家に帰り、練習に打ち込んだ。基本的に相手は父親だった。父に野球経験があったので、一通りの技術は父から教わった。毎日毎日野球。こんなに楽しいことは今まで一度もなかった。楽しむという努力が実を結び、一か月ほどでレギュラー入りした。更に、その野球が好きという純粋な心は才能を目覚めさせた。

バッティングは特に凄かった。打っているときは不思議な感覚だった。相手ピッチャーがボールを投げると、そのボールに対して全神経が集中する。その時に、周りの雑音や景色がふっと消えたように薄れ、ボールだけが近づいてくる。俺がバットを振り出すと、その軌道が見える。そしてボールはその軌道に吸い込まれるように引き寄せられ、やがて高い金属音とともに青い空に消えていく。

五年生くらいのときには、県内に名を轟かせた。次々と立ちはだかるピッチャーの球を、フェンスの向こうへ打ち返していく。弱小だったチームを何度も優勝に導いた。中学の舞台でもそれは通用した。一年時からクリーンナップを任され、三年間すべて全国大会を経験した。その実力を買われ、強豪の私立高校から推薦がいくつも来た。その中の、一番家に近い高校を選んだ。そこは施設や環境もなかなかよかったので、最初から決めていた。

ところが、入学直前の三月、俺は前触れも無く急に倒れた・・・

「ラストー！」

手の平に重い感触が伝わる。撥(は)ね返された硬球は小さなネットの真ん中に捻じ込まれた。バットを置き、ふぅと溜息を吐く。彰弘(あきひろ)は空を仰いだ。善斗(よしと)も釣られて仰いだ。都会では見られない、満天の星空。グラウンドの隅の二人を、まるで「青春だな」とでも言うように夜間練習用のライトが鮮やかに照らす。善斗はぐったりとベンチに座り込んだ。両手を後ろに回して上を向いていた。

「疲れたなぁ。トスだけとはいえ、やっぱ練習後の秘密特訓はきつい！」

「毎日付き合ってくれてありがとな、善斗。約束通り、おごるよ」

善斗はいきなり顔をこっちに向ける。

「当ったり前だろ！明日試合の後絶対だぞ」

二人の笑い声はグラウンドに響いた。別に何がおもしろい訳でもないのに、笑いが止まらなかった。真夏の蒸し暑い風が柔らかに吹く。

「そういえば、最近体はどうだ？」

「うん、自分では分からないけど、医者が前から言ってた通り、この夏休みがいっぱいだ、って・・・」

「そうか・・・」

さっきまでの雰囲気はどこか遠くへ消えていってしまった。

重い謎の病気。原因は不明。入学前のあの日、散歩へ出かけていたら、突然激しい頭痛が襲ってきた。家へ戻ろうとして、途中で変な感覚があったから、多分その時にはもう出血していたんだろう。・・・気が付くと俺は、病院のベッドにいて、数分後間もなくその病気である事を知らされた。

「でも、現実って酷いよな。こんな才能のある奴を、よりによって謎の未解明病だなんてさ」

「まあ、それは仕方が無いよ」

善斗はこっちを向くと、わざと声を出して溜息を吐いた。

「当の本人がそれかよ。なに？もう諦めた訳？」

「いや、諦められないよ。それに最後の夏だし、ここまできたわけだし」

「だよなぁ。なのに試合に出してもらえねえってか。ひでぇよな、あの監督も。ベンチに入れてんだから、起用しろっての。絶対四番だよ、彰弘は。お前ほど打てる奴なんてこの高校にはいないぜ？なのに病気だって事だけで、レギュラー外すなんて・・・最悪だな」

頭の中でそいつの名前を呟く。寺田善斗・・・本当に良い奴だ。一番、仲間想いだ。試合中に仲間がデッドボールをくらって、相手ピッチャーが謝らなかった。それに腹が立った善斗は、相手ピッチャーを殴ろうとした、なんて事もあった。ちょっと不器用だけど、信頼できる友達だ。

「でも、もし試合で使ってたら、既に俺は逝っちゃってたかもよ？」

「そういうこと言うなよ」

「でも善斗だって、チームで一番良いピッチャーだって、俺は思うぞ」

「マジ？はは、センキュー」

照れ笑いを見せる顔には、密かな自信が隠れている。と思う。

「まあでも、もう少しで甲子園だもんな。明日勝てば、決勝だ」

「だな」

絶対に、甲子園へ行く。それが高校球児の合言葉。自分もそう言

えるように、今まで辛い思いをしてきた。一年分の練習を捨てた長い闘病生活。二年になって始められた練習。何度も練習中に倒れ、運ばれた。そして医師に呆れられた。それでも、血を吐きながら死ぬ覚悟で練習してきた。もう駄目だと思ったこともあった。けど、その度に善斗が支えてくれた。

「俺さ・・・」

「ん？」

優しそうな顔で親友は返事をした。

「絶対にこのバットで、みんなを甲子園へ連れていくんだ。お前にも、皆にも、色々と支えてもらったからな。言葉では表せない位、こう、何て言うか・・・だから、その恩返しに、皆を甲子園に連れていく。絶対に、命に代えてでも」

「命だけは残していけよ」

善斗はそう言って立ち上がった。

「楽しみに待ってるよ。そのホームラン」

「ホームランじゃないと駄目か？」

「もちろん」

笑って善斗は答えた。拳をぐっと握る。絶対、絶対だ。命に代えても、この最高のチームメイトを甲子園に連れてってやる。胸に決意を固める。

夜空に一つ、流れ星が見えた。

「そんな・・・」

思わず声が零(こぼ)れた。マウンド上では善斗が悔しそうに下を向いていた。

八回裏、二対二から四番の勝ち越しホームラン。ただし、打ったのは相手。俺ら功南高校の負け越し。一塁側スタンドが盛り上がる。打った相手校の四番、出口がホームを踏んだ。両手を上に突き出していた。実況も盛り上がる。

「出口に一発が出ました！勝ち越しホームラン！ここまで不振の四番が、ついに役割を果たしました！」
前の回からリリーフ―（交代）した善斗は、その回を完璧に抑えた。しかし、この回ツーアウトで、打たれてしまった。次打者を打ち取った善斗は、悔しさに顔を歪めてマウンドを降りてきた。ドンマイドンマイ、と皆の声が連なる。
「くっそ！何てこった！俺の所為で・・・」
「諦めるな。まだ最終回の攻撃が残ってる！」
監督の励ましが飛ぶ。皆がまだ諦めていない声を揃えて、返事をする。まだだ、こんなところで負けてられるか！確かに相手は強い。去年、県大会決勝までいって惜しくも敗れた、強豪シード校だ。そう簡単に点は取れない。でも、功南だって強豪だ。こんな準決勝なんて、例年の事だ。
「絶対取り返すぞ！」
「こっからが功南の底力だ！」
皆が口々に叫ぶ。そうだ、負けてなんて・・・
「あっ、彰弘！」
善斗が急に叫んだ。一瞬、何があったのか分からなかった。突然の痛みで気が付いた。俺の体は後ろに倒れていた。同時に口から血が出てくる。
「ぐふっ・・・」
「彰弘、しっかりしろ！」
「西原、大丈夫か！」
せっかく盛り上がったベンチが、一瞬にして混乱に陥った。それでも試合は動く。この回の先頭打者が打ち上げた。誰も見ていない。くそっ、俺の所為で、チームの皆に迷惑掛けれるか！
とりあえず吐血が止まった。しかし、まだ視界がぐらぐらと揺れている。これはまずい。
「中山！とにかく粘れ！」
監督が指示をする。もうベンチ中大パニックだ。―――駄目だな。

そう思った。もう俺、死ぬかも知れないな。死ぬならその前に、一回打席に立ちたかったな・・・

中山が粘り勝った。しかし、不安そうな顔をこちらに向けながら一塁に向かう。彰弘は足に力を入れて立ち上がる。忘れかけていた、あの約束。

――――皆を甲子園に連れていく。

声を上げて立ち上がった。すぐに善斗が肩を貸してくれた。

「大丈夫か！彰弘！」

「・・・忘れてたな、あの約束」

「お前、今更そんな事・・・」

「今だからなんだ」

善斗の顔が急変した。気付いたようだ。

「・・・まさか、もう・・・」

「監督！」

答えずに叫ぶ。僅かに身動きをした監督が、彰弘の顔を見た。慌てて聞き返す。

「何だ？」

「俺に・・・」

一瞬言葉が詰まった。が、必死に声を出した。

「俺に、最期の打席を下さい！」

「何！」

全員が驚きの表情をした。そして驚くほど鮮明に歓声が聞こえた。

「絶対に、打ちますから・・・」

「馬鹿言え！お前の体で何ができる！」

「絶対に打ちます！」

監督が黙った。少しの沈黙の後、善斗が口を開いた。

「彰弘・・・お前の実力は分かるよ、けど・・・」

他の仲間が声を上げた。岡本が三振に倒れた。次の打者は大野田だ。彼はこの試合全て三振を喫している。とても打てるとは思えない。

「絶対打ちますから」
「彰弘、もうやめ・・・」
「待て寺田」
監督が話し始めた。
「確かに次の大野田よりは可能性はある。ただお前はハンデを持っている。命すら危ない。それでも打つというのか？」
「はい、絶対です」
監督が再び黙り込んだ。大野田が主審を連れて戻ってきた。
「功南ベンチ、タイムですか？早くお願いします」
「監督！」
監督が、静かに目を見開いた――――

鼓動が聞こえる。どくりと心臓が呻いている。もう限界だと。もうこの試合中、いや、もう間も無く力尽きるだろう。それでも、俺は打たなきゃいけない。仲間のために、自分のために。
「彰弘、本当に大丈夫なのか？」
と、ベンチ中に響くぐらい大きな声で善斗は叫んだ。
「大丈夫だよ。」
と少し震えた声で返事した。大丈夫な訳がない。でも、打ってみせる。ヘルメットをかぶり、バットを握る。ベンチを出ると、日の光が目を射す。ゆっくりと、一歩一歩踏みしめるように打席に向かう。
代打のアナウンスで球場に歓声とざわめきが轟く。今この場面を、家族が、功南の吹奏楽部が、地元の応援団が、ベンチのみんなが、そして善斗が、希望と不安を胸に、観ている。両親はどんな思いで観ているだろう。命の心配をしているだろうか。それとも打てるかどうかを心配しているだろうか。まだ幼い舞は・・・。
「彰弘！」
はっと我に返る。気がつくと打席の前で右膝をついてしゃがみこんでいた。顔を上げると、相手校のキャッチャーが心配そうな、し

かし冷たい目でこちらを見ていた。主審が大丈夫かと聞いてきたが、答えずに打席に入る。こんなところで、倒れていられるか。ピッチャーに視線を移す。・・・勝負は初球。あまり長くは持たない。固く閉じていたはずの口から、赤い血が流れ出る。ふっと密かに笑ってみる。何を言ってんだ俺は。こんな死に際の、センスもない奴が打てるわけないだろ。そうだ、打てるわけない。それでも、この打席に命を懸けよう。最後の、たった一度きりのチャンスだ。

主審のプレイの合図で球場が盛り上がる。ピッチャーの美しいフォームから、その腕から、白球が放られる。彰弘が指に力を入れ、左足を前に踏み込む。その時だった。

彰弘の目の前が真っ暗になった。何も見えない。ただ、その暗闇の中でボールが回転しながら、ゆっくりとこちらに向かってきている。ボールの縫い目すらわかる。そうだ。これだ。この感覚だ。力が、戻ってきた。彰弘の命の危機を前に、その執念が、その思いが、力を呼び戻した。

腰を回し、腕を引き、バットを振り出す。ボールが吸い寄せられるようにミートポイントへ入ってくる。

飛んで行け。フェンスの向こうまで、どこまでも。この一球に、この想いを、この鼓動を、この命を乗せて。打った瞬間、彰弘にはボールがとても眩しく見えた。バットを振り切ると、ボールの行方を追いもせずに前屈みになっていく。

ボールは高い金属音を残し、高く、美しい弧を描いて空へ向かっていく。それは太陽よりも眩しく。鮮やかに。多くの人々の夢を乗せて。

西原彰弘、偉大なバッターの魂とともに。

その年の夏の大会準決勝、功南高校は一人の青年とともに散った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8784f/

白い魂、命の球

2010年10月8日15時29分発行